三鷹市山本有三記念館館報
Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report
第17号
2018年9月

企画展

三鷹と有三

ステンドグラスの洋館から

平成31年
3月3日(日)まで

山本有三[1887−1974]が三鷹の地に越してきたのは、昭和11(1936)年、作家として脂の乗り切った48歳の頃のことでした。当時の有三は、長編小説「波」や「女の一生」などの連載によって作家としての地位を確立し、また家庭人としても、七人家族の大黒柱を務め、家庭を支えていました。

生来の病弱と作家としての忙しさから、不眠や眼底出血といった不調に悩まされ、また、七人の家族が暮らすにはそれまでの吉祥寺の家が手狭となってきたことから、執筆に集中できる静かな環境かつ、大家族が住むのにふさわしい大きな家を探していましたが、その二つの条件を兼ね備えていたのが、三鷹村下連雀91番地に建つ洋館でした。当時、玉川上水沿いには雑木林が広がり、別荘地のようであったと言います。玉川上水のほとり、約1200坪の広大な土地に建つ二階建ての洋館は、作家生活・家庭生活の両方にとって、これ以上なくふさわしい環境であったと言えるでしょう。また、大谷石とスクラッチタイルで構成されたコントラストのあるデザインや、白漆喰塗や木の線材による幾何学的な装飾など、流行の建築様式をふんだんに取り入れた豪奢な建物は、この洋館に住むことを決めた当時の有三の、経済的な安定ぶりをうかがわせます。

しかし、時代は、日本が戦争へ向けて進みだした昭和10年代のこと。次第に時勢は逼迫し、それが有三の活動にも大きく影響していきます。代表作「路傍の石」(昭和12年)はこの三鷹の家で執筆されましたが、厳しい検閲交渉を受け、ペンを折ることを余儀なくされました。そうした時代状況の中、有三は次世代の教育に目を向け始めていきます。

昭和18年に発表された「米百俵」には、窮乏の中、学校の設立を訴えた小林虎三郎の姿が描かれていますが、有三自身、時節柄、本を満足に手に取ることのできない子どもたちのために邸宅の一部で蔵書を開放する「ミタカ少国民文庫」(昭和17年)の活動を行っています。この活動には、有三が自分の子どもたちのために買いそろえた蔵書などが使用されました。次世代を担う子どもたちの教育は、一男三女の父親である有三にとって、邸宅を供するに値する活動であったと言えるでしょう。三鷹の邸宅は、当時の有三にとって、家庭での団らんの場にとどまらない幅広い活動の場でした。

戦後、昭和21(1946)年に進駐軍に接収されることとなり、有三一家は邸宅からの退去を余儀なくされます。三鷹で過ごしたのはおよそ10年間というわずかな期間でしたが、時代が大きく動こうとする昭和10年代、作家として、家庭人としての責任を誠実に果たそうとした有三にとって、三鷹の洋館の存在は大変に大きいものでした。

本展では、有三邸の来歴やその造りに触れつつ、有三の三鷹での活動を追うことによって、有三にとっての三鷹の洋館の重要性を探ります。

(文芸企画員・学芸員　三浦穂高)

三鷹の家と山本有三の原風景

友田博通（昭和女子大学 環境デザイン学科 教授）

私は環境心理学の研究者として、山本有三の文学作品に大きな影響を与えたと推測される3軒の家と周辺環境について紹介し、三鷹の山本有三記念館理解の一助としたい。

第一は、明治20年生まれの山本有三が1歳から少年時代を過ごした栃木の家。栃木は今でこそ宇都宮に県庁が置かれているが、明治18年東北本線が他を通るまでは小江戸と呼ばれ舟運で栄えた商都で県庁も置かれていた。有三少年は蔵造りの町並みにある呉服商の一人息子として育ち、周辺には石造りの銀行やハーフチェンバーの学校など洋館も多く、日本の伝統と文明開化の雰囲気溢れる栃木に育った。

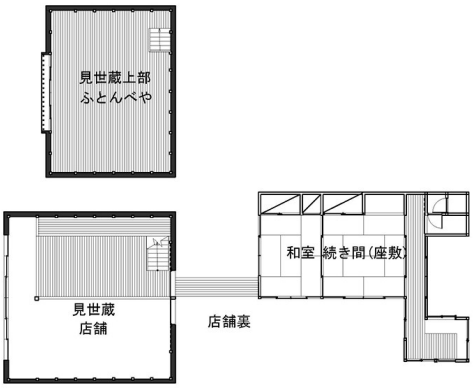

図1 栃木時代の家 推定復元平面図（作成者：友田博通氏）

有三少年が過ごした家については、栃木の住宅に詳しい建築史の藤木竜也先生に紹介いただいた。「店舗を土蔵造にした町家の場合、見世蔵と呼ばれる土蔵部分は店のみというのが基本です。2階建の場合は、明治の後半になりますとここに客用の座敷が備えられることが多いですが、江戸時代から明治のはじめ頃は、2階の階高が低く厨子二階と呼ばれ、物置となっているケースが多いようです。家族の生活領域は、見世蔵の裏側に接続して建てた木造家屋というのが基本的な構成で、若かりし山本有三は店舗裏の和室続き間で暮らしていたと思われます。」『路傍の石』の伊勢屋、見世蔵上部ふとんべや「蔵づくりではあるし、窓には、むかしふうの格子がはまっているので、へやの中は夕がたのように、うす暗かった。」（「路傍の石」）家族の生活の場の和室続き間にいると「店への出はいりに、主人はなんどとなく、彼のそばを通る……」（同前）と記述され、有三少年が過ごした厨子二階の家の生活が連想される。

幸いなことに有三少年の育った環境がしのばれる栃木市嘉右衛門町は、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、蔵の街「栃木」として今や年間２００万人を超える観光客が訪れる。生家に隣接して『山本有三ふるさと記念館』もあり、大塚幸一会長が有三の少年時代の貴重な資料を多数保管していて、有三の少年時代のまちのようすを伝えてくれる。栃木を訪れる方はぜひ山本有三の小説を読み、蔵の街「栃木」の往時の風情や生活を実感していただきたい。

山本有三ふるさと記念館

第二は、大正15年から過ごす有三が建てた吉祥寺の家。母と妻はなさん、5歳の有一君と1歳の朋子さんで入居。その後、玲子さんと鞠子さんが生まれる。早稲田大学を辞して新聞連載小説を引き受け、執筆活動するための家。昭和初期の住居史研

究者礒野さとみ先生は、長女朋子さんの夫で国語学者の永野賢氏による間取り図をもとに、「有三は玄関の近くに客間や書斎を置き執筆活動の場として独立させた。家族の生活の場は庭に面した広縁と八畳・四畳半の二間続きの空間で家族が一体となって生活し、広縁で繋がる離れには祖母が暮らした。」と建設当初を推測する。有三は、二年後には西側の内玄関と母ナカの部屋の上に、二部屋の二階を建て増しした。階段の途中にはシャッターも付け、執筆活動に専念できるようにした。

第三が三鷹の家、地位も名声も確立した有三が探し当て、思うままに改造を加えた洋館。三女鞠子さんは「15歳有一は2階洋風個室、11歳朋子は1階祖母の和室に隣接したサンルームを子供部屋とした。7歳の私は朋子さんのサンルームに机を置き入り浸っていた。2階の書庫では石井桃子さんが調べ物などにいらした。」と語る。洋館への憧れと家族生活とを実によく考えた設計となっている。圧巻は、有三の空間。執筆活動の場は2階の和室書斎と洋室書斎。洋室書斎には畳のコーナーがあり、執筆に疲れたら寝転んだりしたであろう。もちろん、和室と洋室の書斎も部屋を替えて気分転換。社会的な活動も重視し1階の格調高い洋室は応接間、客を待たせるためのヌックもある。長女朋子さんは『いいものをすこし』に「応接間、食堂、ヌックにはマントルピースがあり、外壁は蔦に覆われていて、外国のおとぎ話の家のようだった。」と書いている。

吉祥寺時代の家 提供：山本有三ふるさと記念館

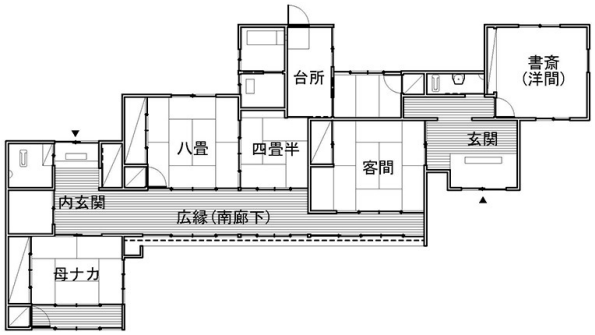

図2 吉祥寺時代の家 推定復元平面図（作成者：友田博通氏）

しかし、この生活も数年、第二次世界大戦たけなわとなり理想通りの生活とは言えなくなる。そして終戦1945年有三58歳、三鷹の家はGHQに接収され大森に和風の家を建てる。1946年12月『路傍の石・あとがき』には、「私はある事情から急に自分の家を出なければならないこととなった……おきゴタツの上に板を敷いて、この「あとがき」を書いている……その昔、屋ちん十五円の貸しやに住まって……当時のことを思いだし、ほゝえましい気分にひたっている。」とある。三鷹の家は1951年有三64歳の時に返還されるが、子供達も結婚し生活も変化し、三鷹の家に戻らず、66歳のとき湯河原に和風の家を建てた。有三にとって三鷹の家は理想の家であるとともに、少し無理をして頑張った家だったのかもしれない。そしてその後、三鷹の家は児童のための有三青少年文庫とした。

三鷹の家を考える場合、山本有三の「日本少国民文庫」を石井桃子さんにお手伝いいただいたこと、石井さんが三鷹の家の書庫に調べ物で通っていたこと、三鷹の家が外国のおとぎ話の家のようだったことに環境心理学的には興味がある。石井桃子が、「クマのプーさん」「ピーターラビット」の翻訳や「ノンちゃん雲に乗る」などを書かれるが、それらは三鷹の洋館の雰囲気とだぶってくる。そしてさらに、アニメを世界に発信し続けるジブリの宮崎駿は、石井桃子さんの「岩波少年文庫」の影響を強く受けたと言う。三鷹の山本有三記念館は、山本有三・石井桃子を介して、児童に夢と憧れを伝える宮崎駿の三鷹の森ジブリ美術館とも結ばれている。

山本有三の住んだ、栃木の見世蔵と和室続き間の商家・吉祥寺の南廊下縁側型住宅・三鷹の昭和初期の洋館、これらを通してみると、日本の「文学における原風景」の変遷の一つが見えてくる。

※文中の「路傍の石」「路傍の石・あとがき」はすべて『山本有三全集 第九巻 路傍の石』（新潮社 昭和51年6月）より引用した。

催しもののお知らせ

第5回 三鷹市山本有三記念館スケッチコンテスト

[作品募集期間]平成30年10月2日(火)～12月9日(日)必着
[コンテスト]平成31年1月19日(土)～1月27日(日)　午前10時～午後6時

[主催]公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団

[協力]株式会社まちづくり三鷹／特定非営利活動法人みたか都市観光協会

[募集作品]三鷹市山本有三記念館又は有三記念公園を描いたもの

[会場]三鷹市公会堂さんさん館　※1月21日(月)は休館

[各賞]山本有三記念館賞、市民賞、審査員特別賞　各1点(賞状＋記念品)

[審査方法]コンテスト来場者の投票及び審査員の推薦に基づき、各賞の受賞作品を選考します。

※応募規定などその他詳細は、ホームページをご覧いただくか、当館までお問合せください。http://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/

第4回審査員特別賞
澤田典佳「にじのやまもとゆうぞうきねんかん」

おはなし会

木漏れ日あふれる記念館で、
楽しいひと時を過ごしませんか。

[日時]平成30年10月13日(土)
14:00～14:30

[会場]三鷹市山本有三記念館　1階展示室B

[対象および参加費]未就学児から小学1年生程度　無料

※未就学のお子様は、保護者同伴でお越しください。
※同伴の保護者様は、入館料(300円)が必要です。

[話し手]おはなしあずきの会 (三鷹市立図書館を中心に活動するボランティアの皆様)

[内容]絵本の読み聞かせ、
紙芝居など。

アフタヌーン・ミニコンサート

大正末期の洋館の雰囲気を味わいながら、
音楽に耳を傾けてみませんか。

[日時]平成30年10月20日(土)
15:00～15:30

[会場]三鷹市山本有三記念館　1階展示室A

[出演]未定(決まり次第ホームページ等でご案内いたします。)

[参加費]入館料(300円)が必要です。

第14回 三鷹市山本有三記念館 秋の朗読会

秋の夜長、趣ある洋館で山本有三作品の朗読に耳を傾けてみませんか。

[日時]平成30年11月3日(土・祝)　18:00～19:30

[会場]三鷹市山本有三記念館　1階展示室A

[定員]35名

[出演]瀬戸口 郁(文学座)

[参加費]入館料(300円)が必要です。

[応募方法]往復はがきに①参加者氏名(2名様まで)、②代表者の住所・電話番号、③何を見て応募したか、④返信用はがきに宛先をご記入の上、当記念館「秋の朗読会係」までお送りください。

[締切]10月11日(木)必着　※お1人様1応募限り。応募多数の場合は抽選となります。
プログラム等詳細は、決まり次第ホームページ等でお知らせいたします。

提供:文学座

《ボランティアガイド》土・日・祝日の午後1時～4時に解説を行っています。事前申込は不要ですので、お気軽に声をおかけください。

編集・発行
三鷹市山本有三記念館
〒181-0013　東京都三鷹市下連雀 2-12-27
TEL 0422-42-6233
ホームページ
http://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/

開館時間：午前 9 時 30 分～午後 5 時
入 館 料：300 円（20 名以上の団体 200 円）
・中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭、「東京ミュージアムぐるっとパス 2018」利用者は無料
※受付にて「年間パスポート（1,000 円）」を販売しております。
アクセス：JR 中央線「三鷹駅」南口より徒歩 12 分、
JR 中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口（公園口）より徒歩 20 分